
白を継いだ少年

とび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白を継いだ少年

【Nコード】

N2760B

【作者名】

とび

【あらすじ】

その夜、黒羽快斗の運命は動き出した。それまで、大勢の他人の前で奇術を披露した事は無かった。警察に追われた経験も、もちろん無かった。快斗は普通の少年だったのだ

夜が、いつもと違う。

高層ビルの屋上から街を見下ろし、快斗はそう思った。

眼下に広がる景色は光の粒で溢れていて、それなのに、空には闇が敷きつめられている。隙間は、頼りなく光る細い月だけで、星の一つも見当たらない。

あの光の中にいた時は気付かなかった。

夜は、暗いのだと。

「キッドの予告まで、あと10分だ！ 奴はどこから現れてもおかしくない！ 気を抜くな！！」

中森警部の檄が美術館内に飛んだ。

白き盗賊の標的は、武装した警官達に囲まれ広間の中央に鎮座している。

しん、と静まった室内。聞こえるのは秒針の音だけ。

細い糸がキリキリと引かれるように空気が張り詰めていく。

カタン、と音をたて、長針が一つ動いた。

予告時刻まで、あと9分。

漆黒の空の下。

とあるビルの屋上に、怪盗キッド 黒羽快斗は立っていた。

乾いた風が快斗の髪を撫で付けながら後方へ流れていく。

視線の先にはライトで煌々と照らされた美術館。そこから威圧感のようなものを感じ、快斗は奥歯を噛み締めた。

ここから見える人間は、針の先程度の大きさにすら満たないし、音も届いて来ないというのに。

時計を確認してみた。

予告時刻まで、あと8分。そして行動開始まで、あと5分。あと、5分。

快斗は懐から美術館の図面を取り出して広げた。幾つもの赤い印と、細かい書き込みがされた図面。頭の中で手順を確認しながら、それを指でなぞっていく。

何度やっても変わらない事は分かっている。図面だって、目を閉じて細部まで思い浮かべられる程、頭に叩き込んだのである。

しかし、こうでもしないと落ち着かない。

「……大丈夫。完璧だ」

風が、強さを増した。

快斗は空を仰ぎ、深呼吸をした。

同時に沸き上がる、緊張と昂揚。

手袋の下で、手に汗が滲んでいる。

不意に、亡き父の面影が脳裡をよぎった。

おやじも初めての舞台の前は、こんな気持ちだったのかな……

誰よりも何よりも尊敬する父であり、師でもある。それは、これから先も変わらない。

その父の隠されていた『顔』を知ったのは、1週間前だった。

『どろぼう、だったのか？』

『おやじは、怪盗キッドだったのか……？』

快斗にそれを知られた事を、父の付き人だった寺井は泣いて悔や

んだ。

しかし、知りたいと思った。知らなくてはならない、とも思った。父が罪を犯した理由を。

父を殺した者の正体を。

そして、闇に塗り込められた空の下で白を纏い続けた、父の精神こころを。

『手品に失敗はつきもの……だがそれを、決して客に気付かれてはいけない』

ああ。分かってるよ、おやじ。ポーカーフェイス……だろ？

時計のアラームが鳴った。

時間だ。

広げていた図面を畳み、迷わずそれに火をつける。

燃え上がった図面は灰を散らしながら、風の中へ流れていった。

しかしキッドは、その残滓を見送らない。

ここから先、見据えるべきは、ただ一点。

「さあ……ショーの始まりだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2760b/>

白を継いだ少年

2010年11月13日11時32分発行